他者理解と私のなかの「共鳴」

――ミラーニューロン、シミュレーション理論、メルロ＝ポンティ――

佐藤義之

一　ミラーニューロンの発見

マカク猿において、他の個体の行動を観察する際活性化する脳のニューロン（神経細胞）は、自らの行動に携わるニューロンと同じであることが確認された。人間では実験手法の倫理的問題性から、個々の細胞単位での対応は確認できないが、非侵襲的な脳活動測定等の手法により、ほぼ同じ事情であるらしいことが確認された。ミラーニューロンの「ミラー」とは、他者の行動を見て自己の同じ動作にかかわるニューロンの活性化が鏡で映すように生じることからそう呼ばれる。この発見は、それ以前からある日常的他者心理理解（いわゆる「民衆心理学」（folkpsychology））の研究においてシミュレーション理論の論者を力づけた。

シミュレーション理論は、日常的他者理解においてひとは他者のシミュレーションを行っていると理解する。私は他者のうちに身を置き移し、そういう仕方で他者の内面を理解する。その置き移しは他者の行動を私の意識のなかで遂行してみるということである。自己の行動を統制するミラーニューロンが他者の同じ行動を見ているときに活性化するという事実は、私が自らの意識のなかで他者の当該の動作を遂行しているということかもしれない。さらにシミュレーション理論の論者を力づけるのは、他者行動を見たときにミラーニューロンが活性化するだけでなく、それと同時に対応する筋肉が潜在的に――本人の自覚には至らず実際の筋肉運動が発動されるわけでもないが、筋肉の電気的測定等の手段によって筋活性化が分かるという意味で「潜在的」に――活性化されるということである。つまりある意味私は潜在的にではあるが他者行動を模倣し、シミュレーションしているとも言えそうなのである。シミュレーション理論の論者の考えるように、他のサルの行動を意識のなかでなぞってみることで、サルは

他のサルの行動を理解しているのかもしれない。つまりミラーニューロンの活性化はそのサルの意識内のシミュレーションの過程と対応している可能性がある。これによりシミュレーション理論が脚光を浴びることとなっている。シミュレーション理論の論者はミラーニューロンの発見により、シミュレーション理論が神経的基盤という裏付けを得たのではないかと考えている。少なくともミラーニューロンは他者行動認識のためのものだという見解は神経科学者の間で広く共有されている。

ミラーニューロンがあるとされる脳部位は行動にかかわる部位であるから、他者の行動を見て、自分もそういう行動をとろうという準備のために活性化されているという疑いが生じるかもしれない。しかしそういうわけでもない。サル自身の手の届かないところにある食べ物を他のサルがとるのを見ていても同じ結果が得られるからである。しかも、手の届くところに食べ物を置いてほかのサルがとる動作を見せない場合、当のサルがとる準備をするならそのニューロンが活性化しそうなものであるが、実際は活性化しない（MB95-6/112）(1)。そのためそのニューロンは準備のために活性化しているとは考えられないのである。

また、ミラーニューロンがあるとされる部位は行動観察の際に単に付帯的に活性化されているわけでない。もちろん付帯的活性化に過ぎぬなら、神経科学者が考えるようにミラーニューロンが行動も行動認識も担っているとは言えなくなるだろう。その場合、ミラーニューロンは行動だけを担い、行動認識の際、付帯的に活性化されるだけで、両機能は相異なる部位に担われているという今までの常識で片付くかもしれない。しかし人間のミラーニューロンがあるとされる部位（ブローカ野）を人為的に（そしてもちろん非侵襲的に）麻痺させ、模倣を命じると、模倣は不可能になる。しかし模倣としてでなければ、同じ行動を麻痺条件下で行なうことはできる(2)。こうである以上、ミラーニューロンは単に付帯的に活性化しているのでなく、行動認識に不可欠の役割を果たしているらしいことが分かる。

なお、マカク猿のミラーニューロンは目的ある動作には反応するが、単なる動作の外形（行動に伴うべき対象を欠くマネの行動）には反応しないという（MB80/97）。このことからミラーニューロンは、単なる客観的な身体運動に反応しているのでなく、動作の目的を踏まえて反応していると理解できる。

だが、まさにミラーニューロンが動作の目的を「理解」しているということから、シミュレーション理論にとって不都合な次のような可能性が排除できないのではないだろうか。ミラーニューロンが実は行動の概念的な目的（たとえば目標物をつかんでくるという目的）だけを管理する部位であり、行動や行動認識の具体的な遂行過程の個々の要素（手を伸ばすこと、つかむこと等）にかかわるものではないという可能性である。こういう場合でもミラーニューロンの麻痺により行動も行動認識も阻害されることだろう。たしかに自己の行動の目的を概念的に把握していないと行動は不可能になるし、

行動認識も目的認識を最大の目的とする以上、行動認識も阻害されてしまう。しかしもし私が上に想定した事情にとどまるなら、ミラーニューロン（と称される部位）は行動と行動認識をともにコントロールしているというのでなく、それらに必須の目的概念を統御する部位であるにすぎない。それだと行動と行動認識のどちらも統御していることは当たり前であろう。もちろん、この場合、シミュレーション理論の裏付けにもならない。ミラーニューロンの働きで目的を概念的に理解しているだけではシミュレーションが生じているということを示唆する事実にはならないのだから。

この疑問を焚きつけるのは、ピーナッツを割るという行動を見たときだけでなく、その行動のたてる音（割っている音）を聞いても同一のミラーニューロンが反応するという事実である（MB103/120）。ピーナッツを割る行為の細部までくまなく聞き取れると思えない――割るためにピーナッツをつまみ上げる動作は聞きとれまい――から、行動の細部は大部分被験者（サル）に対して現れてきてはいないだろう。むしろピーナッツが割れる音を聞いたとき、被験者は行動の細部を飛び越え、行動の目的であるピーナッツを割るということだけをその音を手がかりに判断していて、ミラーニューロンの反応が表しているのはその判断だということではないだろうか。

しかしながらこの疑問は退けることができる。なぜなら「運動皮質の活性化は、観察されたさまざまな運動の持続時間を忠実に再現している」（MB117/136）からである。というのももしミラーニューロンが目的だけを管理しているとしよう。その場合、目的は行動の間一貫して変わらないにもかかわらず、どうして行動の特定の局面（食べ物に手が触れる、等々）に応じて活性化したり興奮が収まったりするのか理由が分からない。この行動局面に応じた活性化の変化は、ミラーニューロンが目的だけを管理しているのでなく、個々の局面に応じた働きをしていること、行動のそれぞれの局面を管理ないし反映しているということを強く示唆している。

また、同じ観察結果から次のような論拠も挙げられよう。ミラーニューロンの活動は自ら行動する場合も他者の行動理解の場合も同様のパターンを示すが、もし目的だけをミラーニューロンが管理しているなら、相手の行動目的が理解できた時点でミラーニューロンの目標は達成されたのだから、それ以降ミラーニューロンの活動は収束に向かうとしてもおかしくない。一方、行動遂行においては、行動の目的は先に述べたように行動遂行全体を統制していなければならないので、最後まで活性化していなければならないだろう。上に述べた推測は違いの一例だが、これ以外にも、行動知覚と行動遂行にさまざまな差異があって当然である。それぞれについて行動目的のかかわり方が違うのであるから。しかし現実にはそうではない。むしろ類似のパターンを見せる。だとすると、目的という一つのものにかかわっているというより、局面局面で異なる行動の一つ一つの局面にかかわっていると考える方がふさわしい。この点では行動遂行でも行動知覚でも同じだから、同じパターンを示すのである。こうして、先の疑問を退けることができた。ミラーニューロンは行動においても

行動知覚においても、行動の局面ごとの具体的あり方にかかわっているのであり、目的というような概念的で行動過程を通じて一つのものだけにかかわっているのではない（MB117-8/136）。

ではこのことを踏まえて、先ほどのピーナッツを割る音にも反応するという事実はどう理解すべきだろうか。この事実は行動を構成する下位諸局面を飛び越えて目的だけに反応していることを示唆しているように思われたのだけれども。

まず確認せねばならないのは、ピーナツを割る音を聞き、それがそういう行為だと知ることは、推理推論というような間接的な知ではなく、直接的な知覚なのだということである。視覚的にピーナッツを割るのを見る場合、直接知覚だということを誰も疑わないが、聴覚だと間接知のように思われがちである。しかしわれわれはひとが歩いてくるのを聞く。これは直接知である。直接の知覚と間接知の違いは何であろうか。たとえばキャンパスの離れた棟にある同僚教員の研究室に明かりがついているのを見て、彼がいると判断するのは間接知であろう（間接知は必ずしもこの事例のような同時性さえ要求しない）。一方、私がひとが歩いてくるのを聞くとき、私は音から推理しているのでなく、誰か分からないがそこにひとが歩いているということを聞き取っている。決定的なのは前者では私がただひとつの事態を元に推理しているのに対し、後者では足音を時間の流れのなかで聞き、何歩かの足音に次の足音を予期し、実際にその予期が満たされる繰り返しがある点である。私はこの予期の充実の反復に基づき、この音が足音であることの真実性と、この音が現実のこの空間内で私に現れている事態だという現前性とを確信する。知覚対象に不可欠の真実性、現前性という性格――これをまとめて「現実性」と呼ぼう――の意識はこういう時間のなかで繰り広げられる予期充実の反復のなかで確保される。このことを反復の過程で確実性が高まるというだけのことと理解すべきではない。むしろ私は予期・充実の繰り返しのなかで、足音をそういうものとして経験し、生きるのである。足音が現実性をもつことは、根拠に基づいて証明された事実であるというより、私が生き、体験した事実なのである。それゆえの現実性なのである。

電灯が点いているのを目にしたという事実は、繰り返し確認され私の体験のなかで現実性を保証していくものでない。むしろこのような事実からの推理は私でなくても、私から電話でこのことを聞いた人でも推理できるのであり、三人称的な事柄に過ぎない。それゆえ対象の現実性を構成する対象との同時性――これは体験の前提である――という、知覚にとって不可欠な意味も抜け落ちてしまうのである。知覚において私は対象にかかわりうる。耳をドアに近づければもっとよく聞こえるはずである。大声を出せば足音の主が驚いて足音は止まるだろうと私は考えることもできる。そういう、同時にこの場に共存するから可能になる、対象への働きかけの可能性も、対象の現実性の意味構成要素である。離れた棟の部屋の電気が点いていることから推理する際は、こういう可能性も欠けている。

このことから、ピーナッツを割る音へミラーニューロンが反応するとき、主体はピーナッツを割る行動そのものを聞いているのであり、単に音から行動の目的だけを推測しているのではないと言えるだろう。したがってもし行動の始点から終点まで、行動を構成する諸局面がおおよそ聞き取れるようなら、目で同じ行動を見たときと同様のミラーニューロンの活性化が見られるだろうと推測できる。ただ、この推測を裏付ける実験結果はないし、実際には聴覚的に聞き取れる行動は視覚と比べて部分的、不完全なことが多く、実験的に裏付けるのはかなり困難であろう。

同一の目的にかかわる行動には行動の具体的なあり方が違っても同一のニューロンが対応すると予想できる。ただ、そのニューロンは行動目的だけでなく、その行動の細部に至るまでかかわるのである。

二　ミラーニューロンとシミュレーション理論

シミュレーション理論の論者はミラーニューロンの研究を踏まえ、シミュレーションはミラーニューロンの活動であると理解する。従来意識的なものと想定されてきたシミュレーションを、無意識的なミラーニューロンの活動に擬することが可能かという問いは深刻ではあるが、ここでは問わない。むしろわれわれはこれが可能だというシミュレーション理論の主張を一応受け入れた上で、シミュレーション理論がこういうものとしてのシミュレーションをわれわれの日常的他者認識において不可欠だと主張している点を検討してみたい。メルロ＝ポンティの他者論があとの主張を検討する足がかりを与えてくれる。以下では彼の議論に即して他者の表情理解の問題を中心に論じるが、他者行動理解と同様、表情理解にもミラーニューロンの働きがかかわっていると考えられている（MB185-6/202）からである。脳傷害によって嫌悪感を感じなくなったひとは、他人の嫌悪の表情も理解できないという（MB181-2/197-8）。

さて、メルロ＝ポンティは他者認識、とりわけ表情を介した他者の内面認識に関する旧来の見解が、現実に適合しないモデルに基づいていると批判する。批判されるその他者理解のモデルは次のようなものである。他者の意図や感情といった内面は他者の表情や行動という外面への表出を介して知られるが、その外的表出がどういう内面状態を表現しているかは、自らがその内面状態をもつときにどういう外的表出を行っているかをあらかじめ鏡を利用して観察し、外面と内面の対応関係をつけておくことによらねばならない――こういうモデルである。

しかしこのようなモデルは生後一五ヶ月の幼児でも大人の仕草のまねをするという事実によって否定されているとメルロ＝ポンティは言う（PP404）(3)。すなわち上記のモデルは、他者の外面表出に対応する内的状態（意図）をあらかじめ知っていて、その意図を推理しなければならないという、幼い子ども――現在では生後一時間もたっていない新生児でも他者表情のまねをすることが分かっている（MNS65）(4)――には非常に困難と思われる作業を要求するからである。もちろ

ん、生得的な対応関係が成立していると考えれば表情解読の困難は回避できるかもしれないが、しかしすべての表情理解を生得的なものに差し向けられるとはとても思えない。たとえば先述のピーナッツを割るのを見てもその音を聞いても（マカク猿の）ミラーニューロンが反応するという実験結果は、学習で可能になったとしか考えられない以上、ミラーニューロンの対応関係がすべて生得的とは考えられない。大人でさえ自他表情の対応付けをそういう操作で行ったとは信じがたい。

またむろん、表情読解は通常、状況のなかで、他者行動も目にしながら行われるが、かといって表情が独立した内面表出要素としての価値をもつことを否定できない。獰猛な犬を前にニコニコしている幼児を見れば、私は彼が危険を認識していないと思う。状況の通常の意味にそぐわない内面をも表情は示しうる。

シミュレーション理論の代表的論者のひとりゴールドマンらもこの問題を自覚し、いくつかの解決策を検討している（SM193-213）(5)。メルロ＝ポンティが批判していた上述のモデルを、彼らは「産出―テストモデル」と呼ぶが、そのモデルについて彼らも同様の問題点を指摘している（SM203）。彼らの属すシミュレーション理論の陣営でその代替案として準備されたものはいくつかあるという。ひとつは、「逆シミュレーションモデル」である。これは他者表情がミラーニューロンの働きにより模倣され、その複製表情――必ずしも現実に顔筋を動かすわけでもなく、潜在的（かつ無意識的）な顔筋運動の場合も想定されている――が私のうちに同じ感情を引き起こすというものである（SM205-6）（「逆」というのは通常のシミュレーションが明証的事態からそれに後続する事態を推測するのに対し、この場合は明証的事態（表情）からそれを生んだ先行する事態（感情）をさかのぼって推測するからである）。前半部についてはミラーニューロンによってある程度裏付けられていると言えよう（SM205）が、問題は後半部である。怒り顔を作るだけで怒りが生じてくるというのはいささか滑稽にも思える（SM205-6）（他者の状況に想像的に身を置けば、そういうことは当然あるだろうが）。たしかに表情が感情を生むということを裏付ける実験結果も挙げられているが、たとえそれが正しいにしても、他者表情をなぞることで私のうちに生じた感情をもとに他者の感情を推測するという方法には特有の困難がある。というのも私の感情というものがそれほど私には明白なものでないからである。

この点についてもまたメルロ＝ポンティが指摘している。純粋に内面事象だけを研究しても憎しみとは何か、明らかになりはしない。胸がしめつけられるような感じや心拍増大だけでは憎しみの本質は明らかになるまい(6)。つまり感情とは世界へのかかわりとしてのみ明瞭であって、それから切り離され内面的なものに限局されると、たとえそれが私のものであっても明瞭ではない。

ところが先述のシミュレーション理論の逆シミュレーションモデルが想定するのは、まさに世界から切り離されて私のうちに生じる内面的なものとしての感情なのである（元

の他者の憎しみは対象をもっているが私の憎しみは真の対象をもたない)。この点は逆シミュレーションモデルの決定的な難点である。

経験的研究を踏まえたゴプニクの議論(7)からも、われわれは逆シミュレーションの難点を引き出すことができる。三歳児がキャンディー箱を見せられ、「キャンディーが入っている」という信念をもつ。しかし箱を開けてみると鉛筆が入っている。この子どもは箱を開ける前の自分の信念を尋ねられると「鉛筆が入っていると思った」と、事実に反する答えを返すという(8)。過去を記憶しておくこと自体が困難だから間違うわけでもない。このことを示すためひとつの予備実験が付け加えられる。子どもの目前で別の入れ物を開け中身を変えた上で、「開ける前に何が入っていたか」という、過去の信念でなく過去の事実を問う予備実験を行い、これに正しい答えを返した子どもだけを本実験に参加させる。しかしそれでも結果は同様である(9)。つまり、信念の変化でなく外界の変化については正しく答えられる。このことは、外界よりも自己の内面の方がとらえにくく、誤りも犯しやすいことを示している。他人の信念について尋ねても同様の結果(10)なので、他者の内面より自分の内面の方がとらえやすいということも言えない。この実験も、「他者感情はとらえるに困難があるが、自己の感情はとらえやすい」という、常識的な想定に疑念を抱かせる。この想定は、自己感情を元に他者感情をとらえるシミュレーション理論が暗黙のうちに当然視している想定である。

また、次のような問題点もある。対象の感情が私のうちに引き起こした感情を元に他者感情を推測するなら、私の感情をその原因としての他者感情に帰属することができねばならない。しかしながらそういう認識の過程は決して容易とは思えない。というのも他者のいらだちが引き起こした私のいらだちを他者に帰属するためには、以下の①～③の段階を踏む必要がある。まず①他者感情が私に同様の感情を引き起こしうるということを知っていなければならない。さらに、②今私がいらだちをもっていることに気づき、そのうえ、③①の知識に基づき、これが他者によって引き起こされたものであることに気づかなければならない。しかしそれぞれの段階において(1)～(3)の困難が生じる。(1)①は少なくとも子どもには困難な知識であろう。(2)②についても、私は自分の感情に気づくことは他者のそれに気づく以上に容易でない（先に述べたように、対象との関係を切り離された「感情」なら余計そうである)。また、(3)③の段階を実現し、私のいらだちを他者に帰属させるためには、私が原因となった他者のいらだちを知っていなければならないが、その知識を前提するなら、そもそも私を迂回しなくても他者感情は知られていたことになり、論点先取に陥る。

ゴールドマンらはほかにもいくつかシミュレーション理論の陣営のモデルを示している。改良版の逆シミュレーションモデルでは、自ら表情筋を動かしてみる（あるいは潜在的にそうする）というのでなく、ミラーニューロンが示唆する視覚―身体感覚の結合によって、表情筋の媒介なしで直接、他

者がその表情をするとき感じているだろう身体感覚が生じる（他者であるかのように感じる）と考える（SM206-7）。また、直前の「かのような」の置き移しもなくミラーニューロンの働きにより直接感情の共有が生じるという考えもある（「直接共鳴モデル」）（SM207）。ただ、改良版逆シミュレーションモデルにせよ、直接共鳴モデルにせよ、他者表情を見て私のうちに生じた感情を認識することで、元の他者の感情を理解するという経路をとる点は変わらない。「観察者のなかでの相関する感情の生起、ないし産出が、経験された感情を「認識」する中枢に伝えられ、経験機構においてその種の感情としての顕在的な（通常言語的な）分類につながるということが前提されている。（中略）この前提はすべてのモデルに共通である」（SM207）。この引用文の「すべてのモデル」とはゴールドマンらの論文のなかで挙げられたモデルすべてを指す。したがって逆シミュレーションモデルについて私が先に指摘した難点はこれらのモデルにも該当するのである(11)。

シミュレーション理論の考えるシミュレーションという過程は、本来は――すなわちシミュレーション理論の出発点である意識的意志的なシミュレーションとしては――他人の状況のなかに意図的に身を置き移すものであり、世界とかかわる志向的な他者の内面をそのままになぞるものである。それゆえシミュレーションを重視すること自体に志向性を排除するような必然はない。ただ、シミュレーション理論の論者がその志向性の意義を十分に認識していないため、表情認識においては、以前からの常識的表情認識の枠組みに従ってその本質的な部分である志向性を不用意に欠落させてしまうのであろう。そしてそのことでモデルを非現実的なものにしてしまう。

志向性の軽視を招いたひとつの要因はミラーニューロンの発見だったかもしれない。というのもミラーニューロンは、自動的無意識的な過程と想定されることにより、志向性と縁遠く、むしろ内面的な過程とイメージされやすくなるからである。ただ、一節で見たように、ミラーニューロンが目的的な行動に活性化することだけを見ても、ミラーニューロンの活動は志向性や意味というものと不可分である。

上記の困難を克服する手段を検討するために、私は次節で引き続きメルロ＝ポンティの議論を参照することとする。

三　他者理解とシミュレーション
――メルロ＝ポンティを手がかりに

まずは、先述のメルロ＝ポンティが批判する他者理解モデル――ゴールドマンが「産出―テストモデル」と呼んだものであり、以下便宜上私もこの語を使う――の困難の克服の方策に注目しながら、メルロ＝ポンティの議論を見ていこう。『知覚の現象学』において彼は、旧来の他者認識の組み替えを図る。「私は他人を行動として知覚する。たとえば私は、他者の死別の悲しみあるいは怒りを、彼の振る舞いや表情、手振り（mains）のうちに知覚するのに、苦悩や怒りの「内的」経験などから何ひとつ借りてくる必要がない。それはその悲しみや怒りが、身体と意識とに分けることのできない世界内

存在の変様であり、……その現象的身体において見えている他者の振る舞いにおいても同様に現れるものだからである。」(PP409)(12)

ここには私の内面知からの推測によらなければ他者の内面は分からないという「産出―テストモデル」の基本的前提がはっきりと否定されている。むしろ他者の悲しみは他者の振る舞いや表情に直接表れている、というのである。ここではこれ以上明確にメルロ＝ポンティは語っていないが、私見では彼の想定しているのは象徴的な読み取りであろう。「産出―テストモデル」によれば、感情とその外面的な表出との間には恣意的な関係しかない。したがって私がある感情を抱いているときにどういう表情をしているかは、鏡などを使ってしか知ることができない。その知識に基づいて私は、他者の同じ表情に同じ感情を推論するのである。しかし実際は、感情と表出の関係はこのような恣意的な関係ではない。悲しみという感情は――直前の引用に言うように――その主体の「世界内存在の変様」、つまり、世界に対するかかわり方、ないし実存様態を示しているのであり、その実存様態は実存全体を覆うものであるから、内的意識だけでなく、行動にも、身振りにも、そして表情にも表れるのである。悲しむ主体は世界に押しつぶされ、世界に対しては受動的で、積極的なかかわりはなされず、むしろ内に抱え込んだ問題にとりつかれている。悲しむときうつむいて目を伏せるのも、世界へのかかわりを避けるその実存の様態を象徴的に――つまり表現と表現されるものとのつながりが恣意的でなく、一種の内的必然性をもつ形で――表している。悲しみの表情が目を閉じて緊張した様子であるのも、実存の様態の象徴的表現である。

さて、感情と表出（表情）の関係が「産出―テストモデル」が想定する恣意的な関係ではなく、このような象徴による必然的な関係があるとすればどうか。その際、表情が必然的な仕方でその感情を表しているのであるから、両者の結びつきを私が――生得的であれ、経験によってであれ――あらかじめ知っておく必要はない。初めて見た表情、私が自ら感じたことのない感情――したがって私がその感情に対応する表情をしたことがない感情――であっても、私はその表情に感情を見て取れる。こうして「産出―テストモデル」が惹起した問題は回避できる。

繰り返しになるが、メルロ＝ポンティは、他者の内面と外的表出の間にこういう象徴的な関係があることを、それほど明確に語っているわけではない。ただ上記の引用における他者感情の直接的解読――私の感情を媒介としない――を説明できるのはこういう関係しか考えにくい(13)。また、実存様態の表出を対象の上に見て取るという図式を、メルロ＝ポンティは他者だけでなく、非生物についてもひろく適用し、そこで象徴的な読み取りを想定している点も上の解釈を補強する。彼は実存的な生の共鳴を他者理解のみならず、対象理解一般の根本に置き、対象理解一般の組み替えに基づいて他者理解の組み替えを図っているのである。

このことを示す彼の議論を少し紹介しておこう。赤が激しい色だと感じることは、私が赤という色に、世界に積極的情

熱的にかかわる姿勢を見てとっているということである。そこに「実存のリズム」「実存の様態（mode）」（PP247）を見て取るというのである。メルロ＝ポンティはこれを決して例外的、逸話的な認識形態と見なすのでなく、ひろく知覚のなかで見られる認識形態であると見なしている。物であっても、世界にかかわる実存の様態をもつものとして、擬人的に理解される。「物のうちにはそれぞれの感覚性質をそのほかの感覚性質にむすびつける象徴性（symbolique）がある。熱は物の一種の振動として経験に与えられ、色の方もまた、物が自らの外に出てくることであって、とても熱い対象が赤くなるのはアプリオリに必然的なのである」（PP368）。熱さも赤さも、共通のひとつの実存のあり方、つまり実存様態の象徴として、等価的なのである。ここで赤い色と実存の様態のつながりを――象徴的な必然の関係でなく――恣意的なつながりとして学び知ったと考えることは馬鹿げているだろう。赤い色が本当にそういう実存様態をもつはずはないのだから、両者の間に恣意的な関係しかないとすれば、文化がそういう結びつきを形作ったと考えるしかない。しかしひとびとが赤にそういうものを感じるというのは文化をこえた事実である。むしろ赤と激しさは必然的結びつきをもつ。もちろんメルロ＝ポンティは、本当の意味で実存様態を有する他人については、同様の象徴的な形で実存様態が表出されていると考えていると見なしうる。

ただ、この実存様態の感得は客観的な仕方でなされるのでない。「諸性質が実存の様態を自らの周りに放射するのは……感覚主体がそれら諸性質を対象として措定するのではなく、それらと共感し、それらを自分のものにする……からである」（PP247）。「空の青を眺める私は、……それに身をゆだねる」（PP248）。青の静けさは、私がその青の色の実存形態をわが身において生きることによって感じ取られる。私は対象の実存の様態と共感、共鳴し、その実存様態を引き受けることで感得する。他者においても同様である。待ち合わせでいささかいらだっているらしい彼の内面を、私は記号を解読するように、客観的な仕方で解読するのではない。彼のいらだちはそれを見ている私に憑依する。いらだつ人を見ていると、私自身がそのいらだちに染められ、不愉快な気分になる。苦しむ他者を見れば私のうちに擬似的にであれ苦しみに似た感情が生まれる。私はこのように他者の感情に巻き込まれながら、他者の感情を理解する。これはありふれた体験であり、シミュレーション理論もこういう体験を出発点にし、これをシミュレーションの発動と見なす。この精神作用が意図的なものでないという点を明確にしておけば、シミュレーションだと見なすこと自体は間違いと言えない。しかしこれを単に自他感情間の関係と見なすのは正確ではない。メルロ＝ポンティの見解に基づいて理解するなら、この事態において、私は他者の実存様態をなぞっている。そのことで私のうちにその実存様態が擬似的に生じ、その実存様態の一環として、他者の感情が複製されるのであろう。相手が人間でなく物の場合でも、そのものが象徴する実存様態が私において複製され、感情を生むのである。

ただ、前節でシミュレーション理論と対決しながら確認したように、私のうちに生まれた感情だけから他者の感情が推測できるわけではない。たとえ他者の感情が私のうちに完全に――実際はそうではないが――複製されるとしても、その感情が志向的対象から切り離して考えられるなら不分明なものにとどまらざるをえない。また、私のうちの複製感情から出発してそれを他者に帰属させるにも、いくつもの困難があるのであった。

なお、メルロ＝ポンティの他者認識においては「身体図式」概念が重要な地位を占めている。「身体図式が、ひとが他人がなすのを見ていることと自分が行なっていることとの直接的対応を保証してくれる」（PP407）。ただ、彼のいう「身体図式」とは自己身体の空間的な把握という、一般的な身体図式概念には収まらない。もしそういう一般的な概念でとらえているとすれば、直前の引用で述べられているのは「産出―テストモデル」と大きな違いがないことになってしまう。客観的な身体は、上述のような実存様態との意味的つながりをもつことはできないため、自他の身体の対応関係は恣意的なものと考えざるをえないからである。むろんメルロ＝ポンティの意図はこういうものではない。むしろこの引用に言う「自分が行なっていること」とは実存の世界への働きかけの様態であり、客観的身体の運動ではない。したがって彼の言う「身体図式」は、目に見える他者の実存様態と私の実存様態の対応関係を保証するものと理解すべきであろう。サッカー選手がボールを蹴るのを見て私の脚に力が入るのは、この対応関係による。実際の身体の動きとして表出されることはないが、実存様態をなぞることによって擬似的にその活動が私のなかで再現される。

彼の想定する身体図式における自他の対応関係は、「産出―テストモデル」が想定するような恣意的結びつきでなく、象徴的結びつきである。だから私は自分の動作の内感と外的視覚像の対応関係の学習を経ることなく、私の動作と他者の動作を一挙に同じ意味のものとして結びつけることができる。つまり、知覚と身体活動の主体としての身体主体のレベルで、他者動作が象徴的な意味を媒介として、一挙に私の動作と結びつけられているのである。「身体図式」とは意味的、目的的レベルにおける身体主体による自己身体把握であり、だからこそ同じ意味をもつ他者の視覚的身体との結びつきを保証できるのである。これは表情においても同様に考えられていると見なしてよい。

四　他者感情認識と共鳴

さて、前節でメルロ＝ポンティを手がかりに検討した考えは、二節で批判したシミュレーション理論の困難を本当に克服できるのであろうか。彼は象徴的感得による共鳴を語るが、他の感情でなくまさに怒りの感情が私のうちに喚起されるためには、すでに他者の怒りが「怒り」として感得されていなければならないのではないのか。そうだとすれば、共鳴は他者感情を怒りとして認識することに後続するものでしかなく、他者感情認識において本質的な働きをしていないのではない

か。

この問いはシミュレーション理論を退けることによって生じた問いである。シミュレーション理論は共鳴によって自己のうちに生じた感情を認識することを他者感情認識の不可欠の経路とみなす。一方私はメルロ＝ポンティにならって直接に他者の上に感情を認識できると見なすから、一見したところ共鳴は認識に不可欠の役割を果たしておらず、それなしでも認識が可能であるかのように見えるのである。しかしもし共鳴と認識がこのように別々の働きだということを認めてしまうなら、別の大きな困難に逢着する。というのもそういう事態はミラーニューロンに関する知見と整合性がとれないからである。なぜなら、行動（ないし感情喚起）とその行動（感情）の認識とは同じニューロンで担われているが、両者が独立の機能ならどうして同じニューロンで担われているのか。偶然と片付けることもできまい。したがって、上述の疑問を退けて、両者の間に本質的なつながりを見いだすことが課題である。これはシミュレーション理論を退ける以上、われわれが直面せざるをえない課題である。当然ながら、この課題は、シミュレーション理論の論者も、またシミュレーション理論を援用できると考えている神経科学者も、検討するはずのないものである。また、メルロ＝ポンティもこのような細かな点について論じてはいない。したがって以下本節では、この課題を私が独自の観点から検討してゆくことになる。

その検討のためにはまず、改めてわれわれの想定してきた「他者認識」というものが何を意味するか考え直す必要がある。対象となっているのは日常的な他者の内面（感情）認識であり、そこでは他者の表情を手がかりにした内面の推測がなされているわけではない。そこで私は他者の感情を「知覚」している（少なくとも認識する私はそう思っている）。つまり、間接的に推測されるのでなく、感情そのものが表情において現れていると私は理解している。一節で確認したとおり、知覚対象は現実性――そこで検討したように、真実性と現前性をもつということである――をもち、現実性という性格は私によって生きられることによって生じている。単なる推測対象に私は現実性を感じない。これに対し、表情を介した感情知覚における共鳴または一種のシミュレーションにおいて、私は他者の内面を生きているといえる。

だがむろん、他者の感情を生きることが直ちにそれを知ることであるわけではない。何と共鳴しているのか無自覚な共鳴もありうる（例えばシェーラーのいう「感情伝染」[14]）。しかしわれわれが問題にしている他者感情との共鳴の場合、①対象となる感情の種類を把握しており、②しかもその際、共鳴対象である他者および他者感情を私および私の感情と区別された他者のものとして把握している。③その上、他者感情を、現実性をもつものとして直接把握している。①と②において認識内容と認識としての性格が確保され、③において当の認識が知覚としてもつべき条件が確保されている。このように、他者感情共鳴を知覚の一例と見なしうる最低限の資格は備えているのである。このように考えれば、他者感情認識と共鳴とは実は同一の事態であると言える。どうして両者

が伴うのか、同一のニューロンで担われるのかという疑問にはこう回答すべきであろう。

われわれの考えをシミュレーション理論と対比してみよう。たとえば失敬な通行人の振る舞いに向けられた他者の怒りが、私のなかに共鳴として擬似的な怒りのような感情をうみだすとする。しかし私自身がその通行人に怒っているわけではないから、私のなかの擬似的「怒り」は他者の怒りと異なり、怒りの真の対象をもっているわけではない。このため先述のように私のなかの感情は明確に怒りとも言えない不分明な感情にとどまる。こうして共鳴から他者感情の種別を判定しようとするシミュレーション理論は袋小路に入り込んでしまう。しかし現実には私の目は他者自身に向かっており、他者の上に直接怒りを他者の怒りとしてとらえる。そしてその他者の感情は私も共に向かい合う間主観的世界と対になっていて、怒りの対象としての通行人とその振る舞いはそのなかに明確な形で与えられている。私は他者の怒りをその志向対象とともに全体としてとらえ理解することができるのである。こうしてシミュレーション理論の困難が回避できる。

ただ、これだけではまだ、共鳴と認識の関係に関する本節冒頭の問題は片付いたわけでない。なおいくつかの反問が返ってくるかもしれないからである。

ひとつ目は次のような反問である。「怒りとの共鳴は怒りだという認識にもとづいて初めて可能である以上、論理的にも事実的にも認識は共鳴に先行するはずだ」。しかし上記の議論からこの反論に言う「認識」は怒りの知覚ではありえない。つまり現実的なものとして怒りが与えられるような種類の認識に達するには共鳴を待たなければならない。だとすると、それ以前の「認識」は――もしそれが存在して、意識に上ってくるとしても――たとえば「怒りかもしれない」という頭にひらめいた思いつきのようなものにとどまるであろう。怒りを直接見ているという確信が生まれ、知覚の名に値するようになるのは、共鳴の発動による。やはりこの事例でいう認識と共鳴とは同じものなのである。

ふたつ目の反問はもっとやっかいである。「他者認識が知覚でなければならず、そのためには対象を生きるという契機が必要であるにせよ、それだけでは共鳴という形をとる必然性はないように思われる。知覚の形態はさまざまであり、共鳴的な、対象に没入して同化するような仕方だけが知覚ではない。どうして他者知覚は共鳴という形式をとるのか」。

この新たに定式化された問いに答えるには、問題の事態における「他者認識」というものがどのようなものかをさらにもう一度確認し直す必要がある。

前節までは、「他者認識」とは何か、どういうことが認識されたなら「他者認識」が実現できたと言えるのかという点について明確にする作業はしてこなかった（たとえばたびたび引用してきた『ミラーニューロン』の著者は、行動認識とは行動を見てその種別を理解し、この情報に基づいて最もふさわしい反応を返す能力だと答えるだけである（MB97-8/115））。しかし、ミラーニューロン研究者やシミュレーション理論の論者は、たとえばミラーニューロンが他者

行動を見て活性化することが他者行動および他者感情を対象とする他者認識に不可欠だというとき、「他者認識」をどのレベルのものと想定しているのだろうか。私は他者の行動を「食べ物をとろうと手を伸ばしている」と理解する。他者の感情を怒りだと理解する。こういう目的や感情種別の概念的な理解だけで「他者認識がなされた」と言ってよいのだろうか。しかし一節で見たように、他者の行動認識に関しては、ミラーニューロンの活動は行動の目的理解につきず、行動の下位諸局面もフォローしているのである。シミュレーション理論の考えではこのミラーニューロンの活動はシミュレーションである。しかし目的を理解するだけならシミュレーションは不可欠とは言えまい。機械の目的を理解するときに、私は機械をシミュレーションしない。また、行動目的の理解だけを求めるなら、他人においても、少なくとも行動の諸局面を最後までシミュレーションする必要はない。目的が分かった時点で打ち切ってよいはずである。にもかかわらず実際には行動を最後までシミュレーションしているのは、行動目的の認識だけでなく何か別の意図があるのであろう。

改めて考え直してみよう。私が行なうことのできる意味のある行動のほとんどは、他者の行動を見本としてそれを習得したものである。ところが、他者行動を習得するためには、細かく他者行動の下位諸局面を追いかける必要がある。この際要求される他者行動理解は、単に相手の目的を理解することだけではない。また、私が他人と共同作業をするときも――単純な作業として、バケツリレーを思い浮かべてみよう――、私は相手の目的だけを理解していたらよいのでなく、相手の行動が今この瞬間にどの行程まで行っているのかを知り、私のバケツを受け取る手の動きのタイミングが相手がバケツを私の方へもってくる行動と合致するようにせねばならない。これは行動のリズムまで含めた同期化（同じ行動をするということではない。タイミングを合わせて違う行動をするのである）を必要とし、そのためには私は相手の行動の諸局面をそのリズムまで含めて理解していなければならない。身体的共同作業における行動理解はこのようなレベルの理解でなければ役に立たない(15)。

このように「他者認識」と一言で言っても、どういう意図での他者認識であるのかによって必要な認識にレベルの差が出てくる(16)。そしてこのことを考慮に入れて「他者理解にミラーニューロンの働きが不可欠と言えるか」という問いを考え直してみる必要がある。ミラーニューロンの働きが必要な行動認識があるとすれば、上に見たような他者の行動習得や、他者との協調、同期といった目的のための他者行動認識である。

行動面の他者認識の話ばかりをしたが、感情面の認識に関しても同様のことが言える。他者の感情認識において、単に怒っているという感情種類を知るだけでなく、その怒っている相手の生の感覚、つまり実存様態を知ることが、他者と協調し、社会生活を営んでいくために有効なのである。たとえば会話の場面では、自らの発言に対する相手の感情の起伏をリアルタイムでとらえていることが、うまく会話を展開して

いくために必要である。このように、会話に代表される相互交渉においては、相手の感情、生の感覚、行動等を逐時的にとらえることが必要である。

こう考えてくると、単なる行動目的の看取、感情種類の看取にとどまらない、より詳細な行動、感情の認識は、社会的な動物としての人間の活動を基礎で支える他者認識と言ってよいだろう。共鳴は自らを無にして相手の生を引き受けることで、このような相手の生の細部までのフォローと認知を可能にしているのである。これに対し、単なる行動目的、感情の種類の認識にとどまる限りでは、共鳴は必要ないだろう。こうして「他者認識」を明確に規定した場合、ミラーニューロンの研究において問題とされているような他者認識には共鳴が必要だと示すことができた。

いくつか補足しておく必要がある。二節で、脳傷害でみずから嫌悪を感じられなくなったひとが、他人の嫌悪の表情理解もできなくなった（ほかの感情の表情認識はできるが）という事例を見た。このことは直上の議論と矛盾しないだろうか。他者感情の種類を認識する程度なら共鳴は必要ないだろうと私は今述べたばかりである。しかし実際には、感情生起できず、それゆえ共鳴もできないひとは、感情種類さえ認識できないのである。感情種類の認識にも共鳴が必要ということにならないか。だとすると上の議論を揺るがす事実ではないのか。

この疑問には次のように答えられるだろう。感情種類の認識と共鳴的な感情の下位諸局面までのフォローとは同じ機能ではない。それゆえ両機能が同じ脳部位で担われる必然性はない。しかし、別のところで担われる必然性もない。むしろ関連する機能であるから、同じところで担った方が、神経作動の重複や無駄を省くという意味で合理的だということも十分予想できる（あくまで憶測にとどまるけれども）。進化史上の本当の理由は分からないが、上の脳傷害の事実から推測できるのは、生物としての人間は進化史のうえで、同一箇所に担わせるという戦略をとったということである。

第二の補足は次の疑問に対してである。「ここまでで答えられたのは、他者認識には共鳴が有効だということだけである。しかし先に立てられた問いは、他者認識に対して共鳴が必然的かというものであった。必然性を示しうるのか。」

これには第一の補足に対して答えたのと類似の仕方で返答できる。当該の他者認識が共鳴的になされねばならない必然性はおそらくない。論理的には別種の認識で同じ成果を得ることも可能かもしれない。しかし共鳴的認識という仕方を進化史上、マカクザルと人間に共通の祖先がとったのである。そのことにそれなりの合理性はあるに違いないが、これも憶測にとどまるのでこれ以上の議論は控える。進化史上の合理性についても、共鳴の必然性についても、これ以上の議論の必要は感じられない。

なお、最後に付言しておくと、行動理解と表情理解がどうして同様にミラーニューロンを活性化するのかという点にも、今までの議論に基づいて示唆を与えることができるように思う。イアコボーニは表情が静止していても動きを示唆するか

らだと答える(17)が、むしろ二節で見たように、行動にも表情にも他者の実存様態が表れていることを思い出すべきであろう。ミラーニューロンはこの実存様態に反応しているのだと考えるべきである。実存様態をその表れとしての行動・表情の細部までたどることが他者とかかわる上で重要なのであり、このような共通性から同じミラーニューロンが行動に対しても表情に対しても活性化するのである。

結論

ミラーニューロンの研究は未確定な部分が多いし、概念的に未整理な部分も多い。今後の研究の展開により知見が大きく塗り変えられることも十分ありうる。しかしミラーニューロン研究が他者理解の問題に今までとはまったく別の観点から新たな刺激を与えたことは否定しがたい事実である。三節まで、ミラーニューロン研究の成果をシミュレーション理論の観点を考慮に入れながら検討した。メルロ＝ポンティの議論を援用することで、自己認識を経由し他者認識に至ろうとするシミュレーション理論の含む問題を批判した。その結果、シミュレーション理論とは別の形で、直接認識である他者認識と共鳴（シミュレーション）との結びつきを示す必要性に迫られることになった。四節で私はその結びつきに関する独自の提案を示すことを試みた。

【注】

（1） MB は以下の書籍の略号。以下もページ数とともに文中にカッコに入れて示す。スラッシュのあとは邦訳頁数。G. Rizzolatti & C. Sinigaglia (trans. by F. Anderson), *Mirrors in the Brain*, Oxford U. P., 2008. 邦訳『ミラーニューロン』紀伊国屋、二〇〇九年。

（2） M. Iacoboni, *Mirroring People*, Farrar, Straus & Giroux, 2008, p. 91. 邦訳『ミラーニューロンの発見』ハヤカワ新書、二〇〇九年、一一八頁。

（3） PP は以下の書籍の略号。以下もこの略号をページ数とともに文中に記す。M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945. 邦訳『知覚の現象学』みすず書房。

（4） MNS は次の書籍の略号。以下もこの略号をページ数とともに文中に記す。J. A. Pineda (ed), *Mirror Neuron Systems*, Humana Press, 2009, p. 65.

（5） SM は以下の論文名の略号。以下もこの略号をページ数とともに文中に記す。A. I. Goldman & C. S. Sripada, Simulationist Models of Face-Based Emotion Recognition, in *Cognition 94*, Elsevier, 2005.

（6） *Sens et non-sens*, Nagel, 1948, p. 93. 邦訳『意味と無意味』、みすず書房、七七頁。

（7） A. Gopnik, How We Know Our Minds: The Illusion of First-Person Knowledge of Intentionality, in A. I. Goldman (ed.) *Readings in Philosophy and Cognitive Science*, MIT Press, 1993.

（8） 同書三二六頁。

（9） 同箇所。

（10） 同書三二〇頁。

（11） シミュレーション理論のもうひとりの代表者と目されるゴードンは、自己経由でなく他者における直接のシミュ

レーションを考えている（R. M. Gordon, Simulation Without Introspection or Inference from Me to You, in M. Davis &T. Stone (eds.) *Mental Simulation*, Blackwell, 1995.）。これはゴールドマンらの分類に当てはまらないであろう。むしろゴードンの考えは次節で見るメルロ＝ポンティの考えと重なる。しかしそれゆえに、四節冒頭で私がメルロ＝ポンティに向けた疑念にゴードンも答えねばならない。

(12)　引用中の……は佐藤による中略を表す。以下の引用でも同じ。

(13)　むろん私は、一部において「産出―テストモデル」に沿った解読がなされたり、生得的解読があることを否定するつもりはない。それだけで説明しきれない事象があり、その説明には象徴的解読という方法に頼らざるをえないと述べているだけである。

(14)　M. Scheler, *Wesen und Formen der Sympathie*, (Gesammelte Werke Bd. 7), S. 25-29. 邦訳著作集第八巻四五～五〇頁。

(15)　ここでは目的を除外して下位諸局面だけを認知するということを想定しているのではない。そういう認知は目的ある行動を客観的身体運動に還元してしまうことになる。ミラーニューロンはこういうものに反応しない（一節）。私はここで目的に統御された下位諸局面を含む全体としての行動の認知を想定しているのである。

(16)　ド・ヴィーニュモンは他者行動についてレベルの差を区別し、今までの神経学者の議論においてこの点が曖昧だったと指摘している。F. de Vignemont, Knowing Other People's Mental States as if They Were One's Own, in S. Gallagher & D. Schmicking (eds.) *Handbook of Phenomenology and Cognitive Science*, Springer, 2010, p. 295. ただ、私がここで述べているのは彼が記述するレベルと、その内実および区別の観点において異なっている。

(17)　*Mirroring People*, pp. 146-147.（邦訳一八二～一八三頁）